じすと　短編集

りふぇいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
じすと　短編集

【Ｎコード】
Ｎ２１５０Ｖ

【作者名】
りふぇいる

【あらすじ】
じすとの短編集です。
日記帳には載せられない短編を公開していきます。
ここに記す短編では『先入観の払拭』を試みています。
※他の「じすと」の作品の繋がりを縫合するものなので、これ単独では理解できないことがあります。

白の追憶1

花壇(かだん)に囲まれた噴水が目立つ、都内のとある広場。
まだまだ残暑が厳しく太陽も照っており、日傘を差したり、薄着で出歩いている人が多数いる。
「母さん。ここはケーキとパスタがおいしいんだって」
「あら、そうなの？」
そんな中、ふたりの女性は広場の脇にある喫茶店で、冷たいものを飲んでくつろいでいた。刀剣竜(とうけんりゅう)のユイフェヴ、リィヴェはカフェオレを一口すする。その前でにっこりと微笑む、浄化竜(じょうかりゅう)のユイフェヴ、トラスティはミルクで喉を潤していた。ふたりは、母と娘の関係である。
「リィヴェは、カフェオレなのね」
「母さんは、ほんとに白いものが好きだよね」
ふたりが着ているものは同じで、白いワンピースとサンダルだった。
ユイフェヴであるふたりの耳は人間のままで、そこから竜の翼を具現化させていない。それをしたら、騒ぎになるからだ。
リィヴェの髪は銀色に輝くもので、その瞳もまたくすみのない白銀だった。
トラスティの瞳も銀色で、その長い髪は漆黒と呼べるほど艶があった。その髪は三つ編みに束ねられ、白のリボンで先端が留められている。
「そうかしら？」
トラスティは、マグカップに注がれたミルクを一口飲む。
リィヴェは両肘をついて、好奇の眼差しを彼女に向けていた。
「どうしたの？」
「ううん。来たよ」
長い赤髪をなびかせる女性店員がふたりの下にやってきて、注文

したケーキを載せた小皿をテーブルに置く。
「ご注文の品は、これでよろしいでしょうか？」
口元から犬歯（けんし）を覗かせて笑う女性の店長。その首には、ひもを通じた羽根ペンが下げられていた。白いエプロンの上を転がるその羽根ペンは、胸のところに赤い点々を残している。
「あ、はい」
「間違いありませんね」
リィヴェの前にはチーズケーキ、トラスティの前にはイチゴのショートケーキがある。ふたりは赤い目をした女性店長に一礼していた。
「ごゆっくりどうぞ」
ふたりが受け答えすると、その女性店長は伝票を席に置いて後でにっこりと微笑む。
「星羅（せいら）さーん」
「はあいっ。今行くわねーっ」
その女性店長は一礼してから、店の奥へと姿を消した。
「さあ、いただこう」
「はいはい。リィヴェはもう少し、しとやかにしたほうがいいですよ」
「母さんに言われると、ショックがでかいんだよね……」
小皿にあったフォークを手にした途端、母親から叱責を受けるリィヴェ。
がっくりとうなだれる彼女は、うらめしそうにトラスティのショートケーキを見つめていた。
「イチゴはあげませんよーっ？」
「うぅ。そっちもおいしそうだよね」
トラスティもフォークを手にして、リィヴェのチーズケーキをじっと見つめている。
「一口だけ、交換ね？」
「え？　いいの？」

「でも、イチゴはダメですよ」
「わ、解ってるよぉ。もう、母さんってば……甘いもの見ると、急に子供っぽくなるよね」
「――うっ」
娘の指摘を受けて、トラスティは顔を引きつらせる。
「あ、ご、ごめん。母さんっ」
手を合わせて、謝るリィヴェ。
対するトラスティは、頬を少しふくらませている。
「もうリィヴェには分けてあげませんっ」
上にあったイチゴをフォークで突き刺して、トラスティはそれを一口で頬張った。
「うぅ。そっちも食べてみたいのに……」
「ふふっ。冗談ですよ。ほら、一口ずつ交換しましょ」
ふたりはおたがいのケーキの先端をフォークで切り分け、同時に口へと運ぶ。
「あら、チーズが濃厚ですね」
「生クリームが、うまい……」
同時に感想をもらしたふたりは、相手のケーキをにらみながらも、自分のケーキを食べ始めた。
「今度は華葉(かよ)様も連れて、この店を訪れましょう」
「うん」
半分ほど食べてふたりは、少し温くなった飲み物を口にする。
「はあ」
「ん？　どうしました。リィヴェ。乙女のような溜息をついて」
「あたしも一応、乙女のひとりだよ……」
トラスティの一言にリィヴェは面食らっている。
「ご冗談を」
「か、母さん……ひっどい」
涙目になるリィヴェを見て、今度はトラスティが目を白黒させた。
「ごめんなさい。それで、どうしたの？」

「うん。学校帰りの、子供が多いよね。親子で、ここらへんを歩いているし」
「……」
娘が何を言おうとしているのか、トラスティはすぐに察した。
リィヴェの目線の先に、両親と手を繋いでいる女の子がいたからだ。ガラス越しに見えるその子は赤いランドセルを背負い、楽しそうに笑っている。母親も女の子と同じで無邪気に微笑み、父親はそんなふたりに連れ回されながらも、穏やかな表情を見せていた。
リィヴェは正面にいるトラスティのほうを向き、「かあ、さん？」の言葉を口にせず飲み込む。
そのトラスティは瞳を潤ませて、その親子をじっと見守っていたからだ。
「……」
リィヴェもまた、その親子をうらやましそうに見つめていた。
目線を母に戻して、リィヴェはカフェオレを一口すする。
その音でトラスティは我に返ったのか、慌ててリィヴェのほうを振り返った。
「ど、どうしたの？　母さん」
「ううん。なんでもないわ」
明るい調子から一転、声と表情に暗い影が走る。
「ごめん。母さん……」
いたたまれなくなったリィヴェは、頭を下げて母に謝る。
膝の上に置かれた拳は震えていて、閉じられた瞳からは涙がにじんでいた。
「気にしなくていいのよ。やつがれは、あなたに父親のことを話してなかったからね……」
「え？　ち、違うよ。あたしは別に、母さんから父さんのことを聞きたいと思ってないからっ」
ケーキを食べ終えたトラスティは、やや乱暴にフォークを小皿に置いた。

その音をきっかけに、近くにいた客の視線がふたりに集まる。
母が怒っていると察したリィヴェは、ひたすらに頭を下げるしかできない。
「頭を上げなさい。何事かと思われているわ」
「で、でも……」
「リィヴェ。やつがれは、いつかあなたにあの人のことを話すわ。けれども、今は……許してちょうだい」
ミルクを口にして、トラスティは娘の瞳をじっと見つめる。
リィヴェもまた、母のまっすぐな目を見つめ返す。
「早く完食して、ここを出ましょう。いつまでも、華葉様を待たせるわけにはいかないわ」
「そ、そうだね。うん」
浮かぬ顔をしながらも、リィヴェはチーズケーキを頬張る。
「んっ。おいしいっ」
無邪気な娘の笑顔を見てトラスティは、この幸せなひとときがいつまでも続くようにと祈っていた。

食事を終えて伝票を片手にレジの前に立つ女性ふたりを、赤い目を持つ女性店長はじっと見つめていた。
「……あ、バイトのふたり」
「はいっ？」
「なんでしょうか」
店長と能登星羅（のとせいら）が記された名札をエプロンにピンで留めている女性は、フロアを見て回っていた男女ふたりにこう指示を出した。
「レジと、しばらく店をお願い。買い出しに行ってくるわ」

白の追憶2

噴水の近くで涼んでいたリィヴェとトラスティ。
トラスティひとりだけは、行き交う人々を見つめては溜息を繰り返していた。リィヴェはトラスティの様子がおかしいことと、不穏な空気が漂っていることには気づいている。
「あなたは、誰ですか？」
トラスティは隣にいるリィヴェを手で制止させて、ひとりだけ後ろを振り返った。その手には、一枚のカードが握られている。
「あら、気づいていたのね？」
長い赤髪を風になびかせる、エプロン姿の女性店長を目の当たりにして、トラスティは眉をひそめていた。
「人払いをしたのは、どういう意図ですか？」
トラスティの発言に、リィヴェは耳を疑った。まだ自分の周囲には、人が歩いたりだべったりしている。
「気づくのが早いやら遅いやら……まあ、いいけど」
女性店長は肩をすくめてから前髪を手でかき上げて、ふたりに種明かしをした。
周囲の人々は色みを失い、黒い姿形となって点在している。それを目の当たりにしたふたりの表情に動揺が走った。
「人影人形（シルエッタ）だと解らないように、工夫したのに……見抜くのが早いわね。雨傘に仕える、ふたりの白の舞姫さん」
「……っ！？」
それを耳にして、リィヴェは自身の背中をトラスティの背に合わせた。黒い粘土を人の姿に成型したようなシルエッタを前にして、カードから銀の双剣を具現化させて身構えている。
「あなたこそ、誰なんですか？」
ウネウネと蠢（うごめ）くそれらと対峙しても、ふたりは臆面もなくホルスに向き合う。それを喜ばしいと感じた女性店長は、微笑みながらト

ラスティの質問に答えた。
「あたくし？　トラディノト・ホルスよ」
「そう」
静かにそうつぶやいたトラスティは、リィヴェから離れつつカードから十字架の大剣を現出させる。それを振り被りながら、ホルスへと歩み寄っていく。
その十字架の大剣の刀身は透き通る白銀で、片刃である。横に飛び出した鍔（つば）が特徴的で、柄（つか）の部分には手垢（てあか）のついた包帯が巻かれていた。
「へえ。でも、下手に近寄らないほうがいいわよ？」
ホルスが使役する無数のシルエッタは、その体色を変えてゆく。噴水の近くにいるものは青に、それ以外のふたりを取り囲むものの一部は赤く、ホルスの周りにいるものは黄色くなっていた。
「な、なによこいつらは……？」
青いシルエッタからは水が滴り、赤いシルエッタからはピンク色の霧が漂う。ホルスを囲む黄色いシルエッタは足下に砂を散らかし、一部に残された黒いシルエッタは声を出さずに笑っている仕草をしていた。
「こ、こいつら……母さん、強行突破しよう！」
「そ、そうね」
トラスティの様子が、明らかにおかしい。それに気づいたリィヴェは、彼女が顔に大量の冷や汗をかいていることに愕然（がくぜん）としていた。
「やってみるといいわ。ふふっ」
リィヴェは銀の双剣で赤いシルエッタに斬りかかる。無防備で刃を受けたそれは、鮮血ではなく、猛毒の霧を散らす。
それに気づいたトラスティは、リィヴェの口を手で塞いでから彼女の膝をつま先で崩し、身体をひねりながら自身の背後へと投じる。
「ぐ……っ」
その霧を吸いこそしなかったものの、トラスティは肌に焼けつくその毒を浴びて顔をしかめていた。

「か、母さんっ！？」
「リィヴェ、あなたは早く逃げなさい……」
転んでシルエッタに囲まれているリィヴェは、飛び起きて黒いシルエッタを蹴散らす。
トラスティは両膝を崩して、その毒によるまやかしで頭を抱えていた。それでも十字架の大剣を手放さず、眼前のシルエッタの群勢に立ち向かおうと直立する。
「させないわよ。属性変化（エレムチェンジ）」
ホルスの小声のつぶやきを受けて、一部の赤いシルエッタは炎に包まれていた。黄色いシルエッタは宝石のような光沢を放ち、青いシルエッタは自身の身体から白い霧を放出させていた。
そして黒いシルエッタはリィヴェが倒したものに集まり、その体（た）躯（いく）を巨大なものにさせてゆく。
「な、なによこれ……」
黒いシルエッタは瞬く間に巨大化し、その大きな手でトラスティをつかんだ。
「ぐ、あああっ」
「母さんっ！？　この、母さんを放しなさいよ！」
リィヴェは黒い巨人に斬りかかるが、相手はトラスティの十字架の大剣を空いた手でつかんで応戦してきた。
打ち合いになったら不利だと感じたリィヴェは、後退してホルスをにらみつけた。
「ふふん。どうするの？　あなたの母親は、あたくしの毒で苦痛を感じている。このままでは……無事では済まないわよ？」
「それは、こちらの台詞だわ。あたしをなめすぎているじゃなくって？」
ホルスは腕を組んで、リィヴェの肢体を観察している。その視線が不愉快だったのか、リィヴェは自身の耳から刀剣竜の翼を具現化させる。
それに生えた鱗は鋭利な白銀の刃のようで、長い銀髪と相まって

美しく艶やかだった。その刃は彼女の銀糸のような髪を切ることはなく、絡み合ってより妖しい輝きを生み出している。
「へえ。やる気なのね？」
ホルスは両腕をほどいて、その手を腰に置いていた。切れ長のルビーのような瞳は、リィヴェの動向を注視している。
「母さん、今すぐに助けるからね」
リィヴェの握る銀の双剣に、純白の光が宿る。それを目の当たりにしたホルスは、青と赤のシルエッタに手で合図した。
「こ、のおっ！」
燃え盛るシルエッタを光の刃で切断するリィヴェ。背後から迫り来る毒霧を放つシルエッタを、リィヴェは尻から生えた尻尾で刺し貫く。それの先端はまさに、白銀の槍。上から飛びかかる青いシルエッタは、耳から生えた竜翼の刃鱗（じんりん）を飛ばして全てを撃墜していた。
「へえ。やるわね」
ホルスは感心していた。リィヴェの戦闘能力の高さだけではなく、ユイフェヴの戦い方そのものに感嘆としている。
「でも、尻尾のせいで下着が見えそうよ？」
「な、だ、だまれっ！」
赤面したリィヴェは、銀の小剣の刃先をホルスへと向ける。
「母さんを早く解放したほうが、身のためだよ」
「それはできないわ」
ホルスは深呼吸を繰り返して、腹部を軽く叩いてから両腕を広げて歌唱を始めた。
「ららら～♪」
リィヴェはホルスへと踏み込もうとしたが、思わず足を止めた。歌に聞き入っているのではない。シルエッタのまとう属性が、活性化したことに驚いたのだ。
「ららら～♪　るるるぁあああ～～♪」
使役されるシルエッタの属性活性（エレムアップ）。と同時に、この場に複数のレイポイントが現出した。赤、青、黄、黒、白、五色のレイポイント

が噴水の周りに現れている。
赤いシルエッタはもはや青と呼ぶに相応しく、蒼炎（そうえん）となるほどの高熱を放っている。青いシルエッタは青い粒子の塊となって、白い濃霧を放っていた。黄色いシルエッタは全身が砂岩もしくは金剛石と化し、不動のままホルスを守護している。
そして黒く巨大なシルエッタは、十字架の大剣とトラスティを激しく地面に叩きつけて、その巨大な体躯でふたりを照らす陽光を遮った。その全身からは黒い暗闇がもれており、日中である今を夜に錯覚させるほどの量だ。
「か、母さんっ！」
倒れているトラスティに駆け寄り、リィヴェはシルエッタの包囲網を前にして、悔しそうに歯噛みしていた。
「た、助けて……華葉様。あたしだけじゃ、とても……」
「弱音を吐いているの？　そんなことでは、あなたたちは未来を切り開くなんてできないわ。全力でかかってきなさい」
絶望するリィヴェに発破をかけるホルス。
敵に励まされて、リィヴェは俄然やる気になったらしい。その瞳には、先刻までの弱さはなかった。

一方、その頃。
雨傘を日傘代わりに使っている少女、折笠華葉（おりかさかよ）は待ち合わせ場所のある公園にいた。その後ろには、歴史の偉人が犬を連れている像がある。
「遅いなぁ。リィヴェとトラスティ……どうしたんだろ？」
泥汚れが目立つ運動靴に白い靴下を履き、デニムの短パンから伸びる白い太ももは健康的に引き締まっている。長袖の白のワイシャツに袖を通し、中に水玉模様のティーシャツを着込んでいた。
藍色の短い髪はボーイッシュな印象で、その顔立ちも少年のようではあれど、少女らしい愛らしさも感じられる。言ってみればどこ

か中性的な美少女だ。
「そういえば、人の気配がないような……」
不審な気配を感じ取り、華葉は耳を澄ます。トラスティとリィヴェの気を探っているのだ。
「こっちかな？」
公園から出ようと考えた華葉は、ふたりの気配がするほうへと駆け出そうとした。
「……っ！？」
が、思わず足を止めた。
華葉の眼前には女性が立っている。蒲公英（たんぽぽ）の刺繍が目立つ、橙色を基調とした和服を着こなしたひとりの女性が。その女性の髪は銀色で腰まで伸びており、これまた蒲公英のかんざしが頭に飾られていた。
「あ、あなたは……？」
華葉は、その女性から異様な気を感じていた。普通の人間の女性ではない、異質なものを。
「あなたには以前、娘のローネが世話になりましたね。あの子のエサである大輝君を、救い出してくれた恩義がある」
「な、何を……って、え？」
華葉は、その女性が口にした名前ふたつに覚えがあった。
「初めまして、わたくしは……流良野樹枝（るらのきえ）と申します」
ていねいに一礼した後、そう名乗った女性は橙色の眼（まなこ）で華葉を見つめながら、微笑みを浮かべていた。

白の追憶3

終焉（ジ・エンド）がアースフィアを訪れ、世界は混沌としていた。
人間とユイフェヴの、無数の不死者が徘徊する港町。その中でひとつ、煌めく白い輝きがあった。
十字架の大剣から放たれる白い剣気は、不死者を跡形もなく消滅させていく。
『ごめんね、あなた……っ！』
トラスティは浄化竜の力を駆使して、不浄と化したかつての同胞を清めている。その中には、トラスティの伴侶もいた。
『ぐ、ああ……っ。と、らす……』
成仏していく伴侶を前にして、トラスティは大剣を捨てて慟哭（どうこく）した。
『何をやっているんだっ！？　このまま、共倒れになるつもりかよ！』
銅扉（どうと）の盾を振りかざす幼女は、活路を開ける唯一の存在を全力で守護していた。その短い手足は群がる不死者を木っ端微塵に吹き飛ばしているが、幼女は長続きする戦（いくさ）に疲弊しているようだった。
『いいから、早くその剣を振るえ！　嘆くのなら、全てが終わった後にしろ！』
人間とユイフェヴの中でひとり、その幼女の存在もまた際立っていた。疲れを見せていても、未だに無傷でトラスティを守り通しているからだ。
『くそ。お姉ちゃんが従えた星喰いが、もうすぐ迫っているというのに……っ！』
この時のトラスティのお腹の中には、まだ名はないがリィヴェがいた。その胎動を知るトラスティは、自分自身の手で夫を清めたことに心が耐えられなかった。
『何をしているんだ！　トラスティ！』

彼女を一喝するのは……灼熱竜のユイフェヴ、ドリスだった。竜区の長であるドリスは、大きな戦斧二刀流と自身がまとう灼熱の炎で不死者を屠っていく。

その長い緋色の髪は陽炎の中で揺れ動いている。その紅の眼差しは立ち上がる不死者を見据えて、彼女は斧の一振りで不死者を一刀両断してみせた。

『フィアリウ！　お前はこの場にいるユイフェヴを全員を連れて、次元の彼方へ逃げろ！』

ホットパンツと胸にサラシを巻いただけのドリスは、自身がまとう炎を蒼く染め上げた。

『ダメだ……ダメだあああああああっ！　どこに逃げたって、無駄なんだよおっ！』

号泣するフィアリウは、泣き腫らした目を向けるドリスへと手を伸ばす。陽炎の中に立つドリスの表情は歪んで見えて、笑っているのか悲しんでいるのか解らない。

『時間を稼ぐと言っているんだ！　ユイフェヴの楽園が崩落した今、死者を利用して悦に浸るバカをどうこうできるのは……浄化の力を有した、トラスティだけだ。頼むから、早く……あたいをひとりにしてくれ』

ドリスはふたつの戦斧をひとつに重ね合わせて、瞬く間に巨大な大剣を形成した。柄である棒ふたつだけは変化していない。

『可変応武器……っ！』

刃を形成するのはグリアンド鋼の粉末を練り込まれた、熱による形状記憶の特性を持つ特殊合金。ドリスが柄の先端にある赤い魔石に触れながら熱を放つことで、その金属は柄を通して熱されて形状を変化させる。その熱は五十度ごとに記憶されており、斧、剣、鞭、鎖鎌、あらゆる武器に変化するのだ。その赤い魔石はドリスの炎だけに反応するように熟されており、可変応武器はドリス以外に扱うことはできない。

『刻まれた名は、イウ・ヴォアレスト……か。とんでもない武器を、

あたいにくれたもんだねえ』
フィアリウはトラスティを抱きかかえて、他のユイフェヴに手振りで撤退を伝えた。フィアリウに付き従うユイフェヴ達は、ドリスを振り返りながらこの港町から離れていく。
『いやぁあああああああああああああっっ！』
感情のない無機な群勢。それを目の当たりにして、トラスティの悲鳴が町中でこだました。
『ジ・エンドは……お姉ちゃんは、どこにいるんだぁあああああああああっ！？』
フィアリウの怒声もまた、町中で響き渡っていた――。

トラスティがホルスの毒によって、過去に見た悪夢を振り返っている時。
華葉は雨傘をたたんで、ノキエと名乗った女性の前に立っていた。
「ローネ、大輝……ちょっと前に都内で倒れていた、男の子のこと？」
「覚えがあるようですね。よかったです」
琥珀のように艶のあるその瞳は、ただじっと華葉の姿を見つめていた。風になびく銀髪もまた、日の光を浴びて妖しく輝いている。
その白い頬に手を添えて、ノキエはにっこりと微笑んでいた。自分の娘とそのエサを救い出した華葉に出会えて、喜びを隠せないようだ。
「えっと。たんぽぽ……あなたは、たんぽぽが好きなんですね」
対する華葉は冷や汗をかいていた。眼前にいる女性には、まったくといっていいほど隙がない。その自然な振る舞いの中にも、優雅さと強(したた)かさが感じられた。
「ええ。幼い頃は、これの綿帽子を飛ばしてよく遊んでいたわ」
下駄でカツカツと地面を叩き、ノキエは履き物の具合を確かめていた。

明らかに日本人ではない顔立ち。しかし、その和服を違和感なく着こなしている女性に、華葉は息を飲んでいた。
「あたしは先を急いでいるので、これで失礼します」
一礼して、華葉はノキエの横を通り過ぎようとした。が、足を止めて思いきり距離を取る。
「あら、どうしましたか？」
華葉は目を疑っていた。目の前に立つ女性は、ひとりだけではない。公園の出口、像の近く、華葉を取り囲むように点在して立つノキエの姿を一見し、華葉は大きく息を吸っていた。
「ふふっ」
その口から犬歯を覗かせて、ノキエは華葉をじっと注視する。
「あなたが探しているのは、トラスティとリィヴェでしょう？」
「えっ？」
左手の薬指に輝く琥珀の指輪。ノキエはそれを見つめながら、話を続けた。
「あなたには白が、瑠璃には黒が付き従う運命。わたくしの娘のローネと、そのエサである大輝君を救い出してくれた礼に……ひとつ、あなたと白の舞姫ふたりに力を貸してあげましょう」
「な、何を言っているのか……解らないよ。でも、あたしに幻術なんて通じないから！」
言いながら華葉は、まばたきしながら目から波動を放った。不自然を全て打ち消す、波眼だ。
「え……っ！？」
しかし、無数に存在するノキエはひとりとして消えはしない。
「ど、どうしてっ！？」
波眼はあらゆるまやかしを打ち消すことができる。華葉はそうだと信じていた。しかし、ノキエは華葉の動揺を目の当たりにして、安堵している。
「ふふっ。あなたは、偽物の幻術ばかりを見てきたのでは？」
「に、偽物？　ど、どういう意味なの？」

ノキエの左手にある指輪が、琥珀が妖しく輝いている。
「――っ！」
後ろから下駄の音がして、華葉は思わず振り返ってしまった。
「だ、誰も……？　な、なんなのっ？」
カツ、カツ、カツ。華葉の耳に届く、下駄による足音。あたりを見回しても、華葉が発見している無数のノキエの姿は誰ひとりとして動いていない。
「な、なにを……？」
一度も攻撃を受けていない華葉だったが、ノキエの存在に畏怖せざるをえなくなった。
「あなたのような人間は、何においても視覚と聴覚に頼りすぎている。ただそれだけのことよ」
「だ、だからって……波眼でも打ち消せない幻術って、なんなのっ！？」
「あなたは常識に縛られすぎている。波眼や波動眼で、何もかも全ての不自然が打ち消せると。その考えは危険よ。わたくしのように、本物がいるということを早いうちに知れて……幸運と思いなさい」
背後から下駄の音がして、華葉は振り返りざまに裏拳を放つ。しかしそれは、空振りに終わった。
「闇雲に攻撃しても無駄よ。それに今あなたは、目と耳に頼りきっているために混乱している。冷静になりなさい。そのふたつに頼らなくても、本物を見極める感覚は……あなたの中に、確かに存在するのだから」
ノキエにそう指摘されて、華葉は深呼吸を繰り返した。眼前に存在する無数のノキエの姿。周囲から聞こえる下駄の足音。目と耳に訴えくるそれらは現実に存在する、不自然ではないまやかしだと華葉は確信した。
「あ、あなたは……あたしを、どうしたいの？」
「ふふっ。娘を救ってくれた恩人に対して、敵対はしないわよ。安心なさい。ただ、あなたと白の舞姫ふたりの弱点を正しに来た。そ

れだけのことよ」
　真横から殴りかかってきたノキエに、華葉は雨傘を合わせた。その一撃は幻影を払うだけに終わる。
「くっ。ただのまやかしなんて……」
　波眼を使おうとしたが、華葉はまばたきを止めた。
「それでいい。あなたが得た力は、逆にあなたを追い詰めるものとなりうる。己の力を過信するのは危険よ。あなたは、あなたの感覚を信じなさい」
　ノキエが何を伝えようとしているのか。華葉はそれを知って、うれしくなって微笑んでいた。
「そう。笑いなさい。笑うことで余裕が生まれる。何より、乙女の笑顔は……花も嫉妬するほどの美しさがあるの」
　そう口にしながら、ノキエは身構えた。白く細いしなやかな指を伸ばして、掌底を見せつけるその構え。
　華葉はその一挙一動を逃すまいと、ただひとり身構えているノキエを見据えていた。

白の追憶４

五色のレイポイントを見やり、リィヴェはそこからシルエッタを活性化させるマナが湧出していると確信した。

赤、青、黄、黒、白、五色のレイポイント。噴水の周りに現れたそれらは、色鮮やかな輝きを放ちながら、そこにたたずんでいる。

「どうしたのかしら？」

ホルスは赤い前髪を手でかき上げて、人から竜の目と化したリィヴェの眼（まなこ）を見つめている。

リィヴェの歯はすでに牙となり、また耳から生えた竜翼からは鋭く細長い刃鱗が伸びていた。彼女の外見はもう、半々が人であり竜だった。

「り、べ……」

自分の娘の足をつかんで、トラスティは上目使いで逃げろと訴える。

「母さん。そこでおとなしくしてて」

「ま、さか……レベル３になるつもり……？」

そのトラスティのつぶやきを耳にして、ホルスは思わず片足を下げてしまった。

「だいじょうぶだよ。せいぜい、あたしじゃあレベル２が限界だから」

両手に握る銀の小剣。尻から生えた、白銀の槍のような尻尾。耳から生えた、竜翼から刃鱗。これらだけでは事足りないと判断したリィヴェは、あるカードを手にしていた。

「そ、それは……」

「使っていい？　この、藍焔刀（あいえんとう）を……」

トラスティは目を疑っていた。リィヴェは有無を言わさず銀の双剣を一枚のカードに戻し、新たな刀剣を手にするべくそのカードを天にかざした。

「出(い)でよ。藍焔刀(あいえんとう)イグノレステ！」
彩り豊かなシルエッタに囲まれながら、リィヴェはその刀を手にしていた。襲い来るシルエッタを瞬く間に消し炭とする抜刀の一閃。
「な……！？」
リィヴェがその藍色の刀身を外気にさらした時、この場に咆哮が轟いた。藍王竜(あいおうりゅう)の猛り声のような轟音は、大気中にある酸素に反応して火花が飛び散ったゆえに生じたものだ。
その蒼炎をまとう片刃の刀身を目の当たりにして、ホルスはたじろいでしまった。その炎はまるで、竜の姿を映すかのように盛っていたからだ。
「それが、アースフィアの名匠……イウ・ヴォアレストの、第二作目なのね……っ！」
震えが止まらないホルス。生命を持たぬはずの武器が、覇者の魂を持ってそこに存在するからだ。
「よく知っているわね。やっぱり、あんたはブックって子と繋がりが……」
「残念だけど、あたくしもその子を追っているのよ。まあ、その職務に支障を来たしそうなものがあるから……こうして、ちょっかいを出しているわけ」
「何を言っているか、理解できないわ」
リィヴェとホルスは、たがいに火花を散らし合う。
「今頃、あなた方のマスターも……手痛い講義を受けているはずだわ」
「なんですって？」
リィヴェはそれを耳にして、刀を両手持ちした。全身から吹き出る汗は、刀が発する熱によって蒸発していく。
「リィヴェ……それは、諸刃の剣よ……っ！」
トラスティの制止の声を聞かず、リィヴェはホルスを守護する黄色いシルエッタに斬りかかった。堅固な金剛石のシルエッタは、瞬時に黒炭と化す。

「くっ！　な、なんて破壊力なの……」
ホルスは大きく後退し、彼女らに敷いていたシルエッタの包囲網を解いた。
「らららららら～♪」
再び歌唱を始めたホルス。それによって、噴水付近のレイポイントから新たなシルエッタが湧き出てくる。そのシルエッタはレイポイントの属性による色そのままで、ひとつふたつだけではなく、限りなく出現していた。
「な、母さんっ！」
また、大気中にも彩り鮮やかなマナが漂い始める。この虹色の蜃気楼はホルスの歌によって集い始めたマナによるもので、その色は次第に濃くなってゆく。
「マナを集めて、何をするかと思えば……こんな下らない人形遊びのためなの？」
リィヴェはトラスティの周囲にいるシルエッタを薙ぎ払いながらホルスをにらみつけていた。
対するホルスは、両腕を広げて歌唱を続けている。集中しているため、リィヴェの声は聞こえていないようだ。
「くっ。これ以上は、させないんだから！」
藍焔刀（あいえんとう）を構えながら、リィヴェはホルスの下へと踏み込もうとして思い留まった。眼前のシルエッタ達は人形にあらず、複数の文字列となっていたからだ。
「まさか……っ！」
リィヴェは見たこともない印章の数々に身震いした。色とりどりのシルエッタは明らかに何かの魔法文字となって、ホルスの周りに集っている。そのシルエッタ達は大気中に漂う自身の色に合致するマナを食らい続け、それぞれが巨大化していく。
「リィヴェ……やつがれは、もう動けるわ」
十字架の大剣をつかみながら、トラスティが立ち上がった。リィヴェは噴水にあるレイポイントを踏みつけて、それを解呪してみせ

た。
「もう手遅れよ」
歌唱を中断して、ホルスはリィヴェにそんな注意をした。トラスティを見つめながら、ホルスは不気味に微笑んでいる。
「無機的な無数の敵を前にして、トラウマが蘇るようでは……まだまだよ。あなたたちふたりが、本当の意味で雨傘の娘を補佐できるようにならなければ……ブックがばらまく、記憶を植えつけられた人間なり具現化した記憶には……立ち向かうことはできないのだから」
ホルスは腕を組んで、自分の周囲を飛び交うシルエッタを眺めていた。
「あなたは、何者なの……？」
トラスティの問いかけに、ホルスは赤い前髪を手でかき上げながらこう答えた。
「あたくしはヴァンプリマの長老会に属する、第二長……改めて名を、トラディノト・ホルス。他の長老は、あたくしをこう呼ぶわ……話術の才女とね」

一方、その頃。
華葉はノキエと対峙したままで、息を乱していた。雨傘を握る左手からは汗がにじんでいる。極度の緊張から汗をかいていた華葉は、それをぬぐうこともせずに目の前にいるノキエをじっと見据えていた。
「どうしたの？　かかってこないの？」
「っ……」
華葉の眼前にいるノキエと、その周りに点在するノキエは身構えてからひとりとして動いていない。しかし、その下駄の足音は華葉の付近から鳴り響いている。いつ襲われるか解らない重圧。それが華葉にとって、今一番の脅威だった。

「なんで、なんで……あなたは、複数も存在するんですか？」
華葉は気で存在を感知できる。目視で確認できる全てのノキエの姿から、華葉は微弱ながら気を感じ取っていた。視覚と聴覚に訴えてくる、現実に存在するまやかし。
「わたくしはひとりしかいないわよ？　あなたが見ているものは、間違いなくわたくしの偽物。本物はここにいるのに、どうして手を出してこないのかしら？」
それすらも疑わしい。華葉はそう思い込まされていた。唯一口を動かしているのは、華葉の目前にいるノキエだけだ。
「仕方ありませんね。そちらから来ないのなら、こちらから参りましょう」
華葉の眼前にいるノキエが、ゆっくりとした足取りで歩み寄る。
「っ。こ、このおっ！」
華葉は雨傘を振るい、ノキエに殴りかかった。
「ふふっ」
対するノキエは右の人差し指一本だけで、その一閃を払いのけた。
「な、そ、そんなっ！？」
払い飛ばされた雨傘の勢いに流されて、華葉が一回転する。思いきり踏ん張って、華葉は雨傘に与えられた勢いをどうにか殺すことができた。その際に華葉は体勢を崩し、膝を擦りむいてしまう。
「っ」
そのやりとりの間にも、無数の下駄の足音が華葉を追い詰める。
「あなたは、本物の幻術を……？」
上目使いで、華葉は前にいるノキエにそう問いかけた。
「幻術？　それは、あなたの波眼で打ち消されるわ」
「じゃあ、なんで……足音が、あちこちから聞こえるの？」
両手を腰に置いて、ノキエは華葉の前で屈んだ。
「音と光よ」
「え？」
「幻術というのは、現実に存在しないものをあるかのように錯覚さ

せる。しかしね。わたくしが行使しているものは、現実に存在するゆえに幻術とは呼ばないの」
「う、うそよっ！　現実に存在しているから……音が、姿が、あるっていうの？」
「ええ」
　ノキエは華葉の頭を撫でながら、種明かしをした。
「音は大気の振動で起こり、姿は光の屈折でどうにでもできる。幻術はそれらを細工せずに対象を錯覚させるため、あまり労力は必要としない。しかしね、それに労力を費やしてまで……相手を混乱に陥れる術もある。わたくしがやっているような、音と光を利用した……現実に存在する、本物のまやかしを使った術がね。あなたは過去に、本物のまやかしを行使する猛者と相対したはずよ。ウトガルザ・ロキにね」
「な、なんで……あなたは、それを？」
　ノキエは膝を伸ばして、おもむろに華葉に背を向けた。
「まあ、わたくしの場合は……相手を不安に陥れ、ノイローゼ気味にするのが目的なんだけどね。あなたは波眼や波動眼を使えるようになったがゆえに、それらで敵の小細工全てをどうにかできると思い込んでいた。でもそれは、現実に存在しない不自然のみを打ち消すの。それらを用いて打ち消せない小細工と接した時に、あなたは間違いなく混乱して窮地に陥っていたわ。よかったわね。わたくしが、それを教えに来たのだから」
　華葉は飛び起きて、ノキエの背に雨傘の先端を向けた。
「でも、音や光は……魔法じゃない。魔法なしで、音と光を……どうこうできないよ！」
「魔法？　ふふっ」
　ノキエは目を細めながら華葉を振り返り、犬歯を覗かせて笑っている。
「あなたは魔法ありきで、音と光が従うと思っているの？」
　その一言は、華葉に強い衝撃を与えた。

「ど、どういう意味……？」
心労から生じる冷や汗を手でぬぐい、華葉はノキエに問い返した。
「魔法は属性に通じるものを従わせる側面は、確かにあるわね。でもね？　魔法なんか使わなくても……属性が、術者に従うことだってあるのよ？　その使用方式（フォーミュラ）を、わたくしたちは自律（フレンド）と呼称している」
華葉はそれを聞いて、確信した。ノキエは魔法を用いて、不自然な形で音と光を従えているのではない。音と光がノキエに従うという、自然な形で成り立っているのだと。波眼と波動眼は不自然を打ち消す。しかし、ノキエに従う音と光は不自然ではない。ノキエの従者として、その周りに確かに存在するのだ。
「うふふっ。その様子だと、気づいたみたいね？」
口元に手を寄せて、うれしそうに微笑んでいるノキエ。
「わたくしは音と光を自律させている、希有な存在よ。それゆえに、視覚と聴覚に頼りきった生物は……わたくしをどうこうできない。でも、あなたは違う。あなたには錯覚が生じる五感だけでなく、わたくしを捉えられる唯一の感覚……第六感、野性の直感を有しているのだから」
「直感……？」
「ええ。あなたには動物的本能が強く宿っている。それこそ、無の境地に通じるもの。さあ、これからは……本気で参りますわよ？」
華葉は愕然とした。目の前に存在するノキエ以外のまやかしが、消え失せたからだ。
「あなたも、本気で来なさい。もはや小細工など不要。わたくしは全力で、今のあなたを正すわ」
ノキエの本気の眼差しを向けられて、華葉は武者震いを禁じられなかった。
しとやかな振る舞いで、掌底を見せる構え。優雅で美しいノキエの存在に、華葉は憧れを抱かずにはいられなかった。

白の追憶5

「トラスティとリィヴェ。あなたたちふたりの弱点は、決断が遅いことよ」
ホルスは腕を組みながら、自身の周囲に魔法文字と化した、印章のシルエッタを浮遊させていた。
「決断が、遅いですって……？」
「ええ。母親の言うように、さっさと逃げるのが正解だったのよ」
リィヴェは歯噛みしながらトラスティの前に立ち、彼女を庇っていた。
「どきなさい」
低い声でそうつぶやいたのは、トラスティだった。
「か、母さん……？」
「んっ？　雰囲気が……な」
ホルスとリィヴェは目を疑っていた。トラスティの容貌が、すでに竜人と化していたからだ。瞳はすでに竜のものとなり、三つ編みに束ねられていた黒髪は不自然にも浮いている。耳から生えた竜翼からは白い鱗が伸び、人肌からも純白の鱗が見え隠れしていた。そのトラスティの全身からは、白真珠のような艶のある光が現れていた。
「煌十字（グリントクロス）……これまた、イウ・ヴォアレストの作品ね」
トラスティが両手で握っている十字架の大剣は、正式名称を煌十字（グリントクロス）と呼ぶ。片刃の白銀の刀身に、横長の黄金の鍔、柄に巻かれた包帯。その鍔には、確かにイウの名が刻まれていた。これはトラスティの清澄（せいちょう）された白いオーラに触れることで、神々しい輝きを解き放つ。
「なるほど……ようやく、本気ってわけね。じゃあ、こちらも奥の手をひとつ見せるわ」
「強がりはよしなさい……そんなマナの傀儡（かいらい）ごときに、もうやつが

れは臆したりしない」
開き直ったトラスティの言動を見るなり、ホルスは白い犬歯を見せながら微笑む。
「ふふっ。あなたたち、ひとつ教えてあげましょうか？」
ホルスは腕をほどいて、手を腰に置いてほくそ笑んでいる。
「確かに、あたくしは人形遊びに長けているわ。でもね、あたくしは遊ぶ場所にも……ドールハウスにもこだわっているのよ」
その一言を耳にして、トラスティはある確信を得た。青ざめた顔で、ホルスとその周りのシルエッタ……町の外観を凝視している。
「リィヴェ！　逃げるわよ！」
「えっ？」
完全な竜人と化していたトラスティは、半人となりてリィヴェの手を引いて走る。
「あら、今回は決断が早いわね」
ホルスは逃げるふたりを見つめながら、印章のシルエッタを従えながら追いかけた。

白の舞姫ふたりは町中を失踪していた。ホルスから遠ざかろうと必死なトラスティを見て、リィヴェは深呼吸した後に声を張り上げる。
「ど、どうしたの？　母さんっ！」
「リィヴェ、気づかないの！？　あのシルエッタは、あの女性の周りに飛んでいるものだけじゃない！　この町そのものが、マナ細工によって造形されたものなのよ！」
それを聞いて、リィヴェは寒気がした。ホルスが従えていたシルエッタは、赤、黄、青、黒と。そのいずれも、自在に体色が変化していた。この彩り豊かな町並みも、ホルスによって作られたドールハウスなのだ。今までふたりが目にしていたシルエッタは、この巨大な町を形作るものから分裂した小者に過ぎない。

「家屋も、この道も、街灯も、何もかもが……ひっ！？」
リィヴェは驚愕した。今自分が口にしたものが、色と形を変えて人形になっていくのを目の当たりにしたからだ。
「生命反応の有無を、この町に出歩いていた人間で確認していたのが間違いだった。町そのものも、疑ってかかるべきだったわね」
言いながらトラスティは逃亡を諦めた。ホルスが管理するドールハウスは、ふたりを静かに包囲していたのだ。
彩り豊かな粘土細工のようなシルエッタは、精巧な人間の姿となってふたりに立ちはだかる。
「生気を橙マナでごまかして、マナによる彩色でここまで……くっ」
「母さん。こうなったら、早く華葉様の下に駆けつけないと」
藍焔刀で精巧なシルエッタをひたすらに斬り捨て、リィヴェは突破口を開き続ける。しかし、無数に現われるシルエッタを前にして、息が上がっていた。
「どきなさい。リィヴェ」
ただひとり、シルエッタはトラスティには近づいていなかった。正確には近づけなかった。トラスティがまとう純白のオーラは、無機なる者を清め滅する力があったからだ。不死者、亡霊、不自然な形で成り立った者を浄化する力だ。
「はぁあああああああっ！」
トラスティが助走をつけて、勢いに任せて振り下ろした刃から白い剣気が走る。それはシルエッタを形成するマナとホルスの思念を分解し、また町の景観を散り散りにしてゆく。
「やるじゃない」
拍手を送るひとりの女性が、ふたりの背後に立っていた。
「もう、追いついていたのね」
「くっ。この女を倒せば、もう追っ手は皆無になる」
トラスティとリィヴェはシルエッタに囲まれながらも、ホルスへと剣先を向けた。白と藍の刀身はともに膨大な気をほとばしらせている。純白の輝き、蒼炎の揺らめき。

この覚醒したふたつの武器と、本気になったふたりを目の当たりにして、ホルスは両腕を上げた。
「参ったわ。降参よ」
唐突なことに、拍子抜けしているトラスティとリィヴェ。
「な、なんですって？」
「ちょっかいを出しておいて、都合が悪くなったから止めるっていうの？」
ふたりはホルスの発言を信じることなく、踏み込もうとした。
ホルスはふたりに戦意がないことを証明するために、自分の周りにいるシルエッタを町に回帰させた。
「言ったでしょ？　あたくしは講義をしていただけよ。あなたたちの弱点を正す、ね」
シルエッタの存在が皆無になったとしても、町そのものが消えてはいない。トラスティとリィヴェは、ホルスへ向けた刃先を下げることはしない。
「はあ。それに、あたくしは話術の才女だと言ったはずよ？　話し合いで解決できる、無駄な争いは基本的にしたくないのよ」
「今更、戯言（ざれごと）を……！」
トラスティが大剣を振り被った時、ホルスは肩をすくめながらふたりに背を向けた。
「どうしてもっていうなら、両方の意味で奥の手を出すだけよ？」
低い声でそう脅したホルスは、町の景観を微かに振動させた。あたり一面の家屋が、人間の手のような形になりかけたのだ。
トラスティとリィヴェはそれを目の当たりにし、恐怖で身をすくませる。ホルスが使役するシルエッタの大本は、間違いなく町そのものだとふたりは確信した。
「ほら、向こうからあなたたちのマスターが来たわよ？　黒幕と一緒に、ね」
ホルスの言葉を耳にして、ふたりもその気配に気がついた。前に目を凝らし、こちらへ歩いてくる雨傘の少女と和服の女性を見つけ

てふたりは……構えていた武器の刃先を、静かに地面へと落とした。
「とりあえず、嫌でなければ……皆でお食事しない？　あたくしの店で、ごちそうしたげるわ。もちろん、今までの無礼を詫びるために無償で提供させてもらうわ」

雨傘を両手で握り締めて、華葉は不動のままのノキエに近づいていた。
「ちょっと待った」
「はいっ？」
ノキエに呼び止められて、華葉は目を白黒させている。
「指輪。大事なものだから……」
「あ、はあ」
ノキエは左手の薬指にある琥珀の指輪を外して、それを大事そうに懐にしまった。
「失礼。今度こそ、参りましょう」
身構えたノキエは、深呼吸して華葉の接近を待っている。
「では、こちらも参ります」
華葉は思いきり踏み込んで、雨傘でノキエへと殴りかかった。横からの薙ぎ払い。ノキエはそれを、人差し指だけで弾き返した。
「くっ」
またしても同じように払われて、華葉は歯を食い縛る。と同時に、そこに働いた力の原理が何なのかを確信した。
（音による大気振動……じゃないっ！　衝撃波だ。
人差し指のデコピンだけじゃなくて、指先から一点集中型の衝撃波を放ってる。
それで雨傘の芯を捉えて、攻撃そのものを無駄な力なく押し返しているんだ）
「あら？　わたくしが指弾を放っていると、気づいたみたいですね」
「やっぱり……あたしは親指でできるけど、指から大気の弾丸を放

っていたんだね」
「ふふっ。よそ見していると、危なくてよ？」
華葉の真横から、ノキエの幻影が殴りかかってくる。華葉は思わず、雨傘を広げて防御してしまった。
「う、ぐ……っ！？」
背後から脇腹を殴られた衝撃。正確には自律する音が、大気を用いて衝撃波を華葉に打ち込んだのだ。
「あ、ぐぅ……ああ」
よろける華葉は、ノキエを見据えながら大きく飛びのく。無防備な状態で受けた一撃は、華葉の意識を揺らがせるには充分な威力があった。
「く、うぅ……な、に……今のは」
「言ったでしょう？　本気で参ります、と。音と光は一緒ではない。光があなたに目に見えるまやかしを与えて、音は目に見えない一撃をあなたに加える。そしてわたくしは、その生きている音と光とともに……あなたと相対していることを忘れないで」
華葉は対峙している相手が、ノキエだけでないことに身震いした。意思を持つ音と光が、自分の周囲で隙をうかがっている。
「だったら、これでどう？」
華葉はノキエの背後に回り込み、掌底で背中を狙おうとした。しかしそれは、ノキエの掌底によって受け止められた。それも、振り向かずに合わせられだのだ。
「な、なんでっ？」
「さあ？」
おもむろに振り返るノキエは、合わせた掌底で華葉を突き飛ばした。
体勢を崩すも、踏ん張って公園の出入口で静止する華葉。
「あたしの行動が、見えているっていうの？」
「あら？　ここにいるのは、本物のわたくしですよ？　まだ、ここに立つわたくしの存在を疑っているのかしら？」

「え？」
ノキエは華葉がある重要なことを見落としていると指摘した。
「音と光がいるから、視覚と聴覚であなたを捉えるのはできないって……あ」
華葉は眼前にいるノキエが本物だという意味を、改めて悟った。
「ええ。わたくしはあなたに対して、まやかしを使うのを止めた。そんな小細工を仕掛けたところで、すぐにあなたはわたくしを捉えるのだから」
「ううん。その、逆だよね？」
冷や汗まじりで、華葉はノキエに問いかけた。そのノキエは、正解だと言わんばかりに微笑み、またうなづいていた。
「ええ。音と光は、あなたの姿を映すためと生きていることを示す証となる。あなたが音を立てれば、そこに存在すれば、否が応でもわたくしはあなたの存在を感知する。わたくしも音と光に頼りきってはいるけど、逆に頼られている存在でもあるのよ」
華葉は音と光の自律の本質を知り、絶句していた。華葉がノキエを捉えようにも、音と光がそれを妨害してくる。また、それらは術者であるノキエに華葉の存在を常に報告する。捉えようがなく、逃れようがない。ノキエに従う音と光は、華葉にとって最大の障害であり脅威だった。
「それともうひとつ。あなたは気づいていないことがあるわ」
「え？　ま、まだ……何かあるというの？」
「それは、わたくしの力量よ」
立ち上がろうとした華葉は、思わず膝を崩しかけた。ノキエが放ったのは肉体だけを震わせる殺気ではなく、霊魂まで揺り動かす凶気。ノキエに見つめられただけで、華葉は涙目となっていた。
「どうしたの？　あなたは過去に冥界の巫女……霹靂蓮とやりあっているでしょう？　凶気への免疫は、あると思ったのに」
声を出すことができず、ただ泣いてわめくしかできない。華葉の精神は恐怖一色に染まっていた。しかしそれが、華葉の本質を覚ま

してしまった。
「ん？」
「ま、だ……ぁっ」
追い詰められた時の、小動物の反応。ネズミもネコにしいたげられていれば、噛みつきたくもなるものだ。
「まだあああっ！」
飛び起きて華葉は足を踏ん張って、地震を起こしてノキエを転ばしにかかる。しかし、当のノキエはあくびをしながら、足さばきだけでその揺らぎをしのぎきっていた。
「……？」
地鳴りを歩くことでかわしたノキエは、華葉の構えを見て違和感を抱いていた。まるで鏡で映したかのように、自分と同じだったからだ。雨傘を握ってはいても、空いた手の掌底を向けながら両足でしとやかに歩き、ノキエへと迫っている。
「まさか……？」
今度は逆にノキエが戦慄することになった。華葉はほくそ笑みながら、その掌底で大気を叩く。
息を止めて、ノキエは手刀で大気の波を払った。微動だにせず観察している華葉を見つけて、ノキエは確信を得た。
「物真似なんて、そんな付け焼き刃など……」
ノキエは華葉の表情を見て絶句した。笑っている。それも、心の底から楽しそうに。そしてその笑みは、静かにノキエに恐怖を植えつけた。
「くっ」
自律した音と光が、華葉へと襲いかかる。実体のない幻影、四方八方から飛び交う衝撃波。華葉は手刀で正確に、その波だけを切り払った。
「やぁあああああああああっ！」
払った動作の勢いに任せて、華葉は雨傘に集中させた気をノキエへと放つ。

「何のつもりかしらね！」
それを再び手刀で切り払うノキエ。華葉はその一挙一動を、逃さず観察していた。
「……っ？」
自身の中で育まれる恐怖の正体。ノキエはそれを確信して、気持ちを改めた。
「あなた、わたくしの技を……見て、覚えているわね？」
冷や汗をかきながら、ノキエは手を突き出して自律している音と光を制止した。華葉は目に見えない相手が気配を消したことに、安堵の溜息をついている。
「あはは……なんでか知らないんですけど、あたしは物覚えだけはいいんですよね」
ついさっきまで焦りが見えていた華葉だったが、今は物静かなたたずまいでノキエの前に立っている。
「決めたわ」
「はい？」
ノキエは構えをといて、腕を組んで何度もうなづいてこう告げた。
「華葉。気が変わったわ……一度きりの講義なんて、もったいない。あなたは、わたくしの生涯最後の弟子になりなさい。わたくしの全てを、あなたに託させてもらうわ」
首を傾げていた華葉は、それを耳にして目を丸くしていた。

それから、ホルスの喫茶店にて。
四人は席に着いて、それぞれの顔を見て反応をうかがっていた。
「華葉様……あの」
「ん？　どしたのさ？」
トラスティは、華葉が羨望の眼差しでノキエを見ていることに引いていた。その華葉はというと、ノキエの上物な和服に見とれており、その手で感触を確かめている。当のノキエは、その熱視線に困

惑していた。
「いえ、なんでもないです」
「母さん……昨日の敵は、今日の友っていうし、さ」
「まだ今日のままなんですけど……」
トラスティとリィヴェは、華葉の様子を見て苦笑いを禁じられなかった。
「ところで、何を食べるの？　パスタのデザート、なんでも注文していいわよ」
「ホルス。とりあえず、カルボナーラとサラダセットに、ミルクをジョッキで」
ノキエも苦笑しながら、自身の注文を口にする。
「は、はい……。もしかして、ミルクをジョッキで飲むのって……？」
「ん？　どうかしたの？」
「いえ」
ホルスは師も師なら、弟子も弟子だと思った。
「あ、あたしも同じので。ここのお店来るの初めてだし」
「あら、よかったわね。で、そちらの舞姫さんふたりは？」
トラスティとリィヴェは警戒心のない無邪気な華葉を見て、頬をほころばせていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2150v/

じすと　短編集

2011年8月11日03時25分発行